

シモーヌ・ヴェイユの社会的抑圧論〔3〕

八 木 正

1 ヴェイユの思想の特質

2 社会的抑圧論の構造と展開

〔1〕初期革命論集から (以上 12号)

〔2〕『抑圧と自由』

〔3〕『労働の条件』 (以上 13号)

〔4〕ある転機——スペイン内乱

〔5〕『「イーリアス」力の詩篇』ほか (以上 本号)

〔6〕宗教的省察から

〔7〕『根をおろすこと』

3 社会学的意義

〔4〕ある転機——スペイン内乱

ヴェイユの生涯と論文・手記類とを対比させてみるならば、スペインでの短い経験が彼女に重大な転機をもたらしたであろうことは、想像に難くない。

女工生活を中心とする時期にやや戦争の問題から遠ざかった観のあるヴェイユは、スペイン市民戦争に進んで参加することによって、戦争のもつ固有のむごたらしい現実と必然性に否応なく引き戻されてしまったように見える。初期の頃にすでに戦争が絶対の悪であるとの確信を抱き、革命戦争すら革命の墓穴を掘るものとみなしていた彼女は、これ以降、戦争の冷酷なメカニズムの考察を中軸として、力そのものについての根源的な問いかけを深めて行く。

彼女はまず、師アランの問いに答えるという形で、尊厳と屈辱の問題と関連づけて、戦争をこうとらえている。

「自己の尊重は人が自由に決意してみずから行なう行為のみよりどころとする。侮蔑された人間が自尊心をとりもどすために戦いを必要とすることもありうる。しかしそれは、手をつかねて侮辱をこうむっていればどうしてもおのれの怯懦を信じざるをえなくなるという場合に限られるであろう。このような問題については各自が審判者であり、それ以外に審判者はない。自己の尊重を保つために生命を賭けなければならぬか否かの判断を他人

に委ねることができようとは考えられない。この意味での尊厳の擁護が拘束により強制されることなどありえないのはさらに明らかである。拘束が登場するや否や自己尊重など問題ではなくなる。……上のことから出てくる結論は、戦争はみずからおのれを蔑まないですむための手だてとはけっしてならないということである。」（「アランの問いに答える」（1936）、著 I 228 ページ、EHP p.244～45）

「現代生活の逆説の最たるものは、市民生活において、いつか国家の尊厳のために死地に送られるだろう人びとの、個人としての尊厳がふみにじられているのみにとどまらず、こうして共同の名誉を守るために彼らの生命が犠牲にされるまさにその時に、彼らがそれ以前よりもはるかにきびしい屈辱にさらされることなのである。……

永久的でほとんど組織的といってよいような屈辱は、われわれの社会組織の本質的な要因の一つで、戦争平和を通じてのものだが、戦時にはそれがとくに強まる。……さらにひどいことは、自分らにはけっして認められたことのない尊厳の名のもとに奴隷たちは死地にやられるのだが、この戦争が抑圧機構の本質的なからくりをなしているのである。抑圧と不平等を実際に減少させる手段を具体的につぶさに検討するとき、つねにつき当たるものは、戦争であり、戦争の諸結果であり、戦争準備からくる諸要請なのである。この難題の結び目は解くことはできないであろう。断ち切らねばならないのだ。もっともそれができるとしてのことなのだが。」（同上、著 I 230 ページ、EHP p.246～47）

1936年のものと推定される断片の中で、ヴェイユは、スペインでは何が起きているのかと問いつつ、革命戦争がもつ不条理を暗示するような文章を残している。「革命が社会問題についてのより高度の、よりきびしい、より明晰な意識に自動的に対応するというのは、真実ではない。真実なのはその反対だ。少なくとも、革命が内戦の形をとるときには。内戦の嵐のなかでは、諸原則は現実に通じるあらゆる尺度を失い、それに応じて行為や制度を判断しうるあらゆる種類の基準は消滅し、かくて社会変革は偶然の手に委ねられる。」（「断片」、著 I 321～22 ページ、EHP p.217）

こうしていよいよ、ヴェイユの生涯における最も重大な転回点にさしかかってきた。私の判断に誤りがないとすれば、彼女の重大な転機を示すのは、ほかならぬ「直言」と題する一文である。この短い文章がもつ重さは、いくら強調してもしすぎることはないように思える。これも1936年に書かれたものとみなされているが、彼女はきわめて卒直にこう記している。

「それなのにスペインでみられるものは何か？そこにもまた、悲しいかな、拘束の諸形式が生まれ、無政府主義者の絶対自由主義的で人道主義的な理想に直接に相反する非人道的行為が生み出されている。内戦の雲行きや要請のほうで、内戦をもって擁護しようとしている希求よりも強力なのである。」（「直言」、著 I 326～27 ページ、EHP p.218）

具体的にいうと、スペインでは、国民防衛会議の手による軍事的拘束も、労働における

拘束も存在するばかりか、裁判の真似ごともしに銃殺することさえあったのである。民衆の名において何の罪もない民衆がむごたらしく殺されて行く事実に、ヴェイユは想像もできないほどの烈しい衝撃を受けたにちがいない。後年(1938年?)、ベルナノスに宛た手紙の中で、彼女はスペイン内戦における革命家たちの精神性を次のようにきびしく批判している。

「バルセロナでは、討伐という形で、一晩に平均50人が殺されました。……こうした場合、死んだ人の数などは、おそらく肝心なことではないと思われます。肝心なのは、人を殺すということに対する態度です。……私は私で、次のように感じたのです。つまり、世俗の当局と教会当局とによって、生命に何らかの価値をもつ人びとの埒外に、あるカテゴリーの人たちが置かれた場合、人間にとって人を殺すことほど自然なことはなくなる、と。人を殺しても、罰をこうむるおそれも、咎めを受けるおそれもなければ、人は殺人を犯すものです。あるいは少なくとも、人殺しをする人びとを、はげますような微笑で包むものです。たまたま、最初いささか嫌悪をおぼえたとしても、人はそれを口にするをばばかり、やがてはそれをのどの奥にしまってしまいます。男らしさを欠くと思われたくないからなのです。そこには一種の誘惑、一種の酩酊のようなものがあり、強い精神がなければそれにさからうことは不可能なのですが、このような精神は例外的なものだと思わずにはおられません。というのは、私はそれに相まみえたことは一度もなかったからなのです。」

(「G. ベルナノスへの手紙」, 著 I 474~75 ページ, EHP pp.222~23)

こうした衝撃を胸に秘めたまま書いたと推測される「トロイア戦争をくり返すまい(言葉の威力)」(1937)と題する論稿は、スペインでの経験を背景において考えてみると、きわめて意味深いものに思われてくる。その中で彼女は、あらゆる抗争の中に存在する不条理性をためらうことなく指摘し、なかんづく言葉のはたす盲目的作用に注目している。

「技術によるある種の自然制覇が人間にもたらしてくれる相対的安全性も、人間集団間の競争から生まれる破滅と殺りくの危険のため、大幅な帳消を余儀なくされている時代——私たちはこのような時代に生存している」という言句に始まるこの論文は、「人類の歴史の全般にわたって、比較を絶して激烈な抗争は目標なき抗争である」という逆説的な真理にもとづいて、人類に破滅をもたらすであろう人間同志の抗争のもつ不条理性、悲惨さを容赦なくあばいている。「人類を不条理きわまる破局におとしいれるためには、神々も秘密の陰謀も必要ではない。人間の本性だけで十分なのである。」(著 I 372~74 ページ, EHP pp.256~57)

人命にかかわる不条理性の例には、事欠くことはありえない。国家間の対立が、それである。ファシズムと共産主義の対立が、それである。理念の対立が、それである。ここにおいて、言葉がもつ魔力そのものに注意を向けないわけには行かない。

「今日、ものの見える人にとっては、現在生まれている抗争の非現実的性格以上に痛ま

しい徴候はない。ここでは、ギリシャ軍とトロイア軍の闘争よりもさらに現実性は少ない。トロイア戦争の中心には、まだ一人の女性がいた、しかもそれは絶世の美女であった。私たち現代人にとって、ヘレネーの役割を演ずるのは大文字で麗々しく飾られた言葉なのである。血と涙でふくれあがった、こうした言葉の一つをひとつとらえて圧縮してみるなら、私たちはそれが無内容であることに気づくだろう。内容もあり意味もある言葉は殺りくくではない。……ところが、意味のない言葉が大文字でつらねられているとしよう。少しでも周囲の状況がその言葉に向かって働くなら、人間たちはその言葉をくり返しながら流血の惨事をひきおこし、破壊に破壊を重ねるだろうが、それらに呼応する何物をもけっして手に入れることはないだろう。それらの言葉が無意味である以上、いかなる現実もそれらには呼応しえないのだ。そこで、成功は、それらに敵対する言葉を採用する人間集団の粉碎ということだけに限定される。」(同上、著 I 374 ページ、EHP p.258)

「私たちは変転きわまりない多様な諸現実のまっただなかに生きており、それらの現実はある種の条件下である範囲内で変化するところの外的必然性の動的な作用によって決定づけられている。しかるに私たちが行動したり、闘ったり、自分自身や他人を犠牲にしたりするのは、相互に関係づけられも具体的事実と関係づけられもできない、結晶し孤立した抽象語に従ってのことなのである。私たちのいわゆる技術時代は、風車と格闘することしかできない。」(同上、著 I 376 ページ、EHP p.259)

こういう判断に立って、ヴェイユは人びとを死にまで駆り立てる言葉のいくつかをとりあげ、その実体なき空虚さを鋭くあばいている。《階級闘争》という言葉が、その最たるものである。ある人びとが絶対悪を表象させている《資本主義》という言葉も同様である。否、ほとんどの政治的語彙の中心に見出されるのは、空無でしかない。人びとが空虚な言葉のために死の舞踏を踊りつづける様を、彼女は「盲人たちの盲目的闘争」と表現したのであった。「資本主義の敵対者と擁護者との闘争、何を革新すべきかを知らぬ革新派と何を保存すべきかを知らぬ保守派との闘争は、盲人たちの盲目的闘争であり、むなしい闘争であり、そしてまさにこうした理由によって皆殺しに堕しかねないものだ。」(同上、著 I 386 ページ、EHP p.268)

彼女は、こういう「空虚な抽象語の各々に一つの人間集団が呼応している」とも言う。われわれは、イデオロギーが固有の意味で集団的な信条であり、集団成員の支持・献身によって拡大再生産されて行く性質をもっていることに留意しておいてよかろう。それはともかくとして、さらに重要なことは、空虚な合言葉や公式をめぐるこの人間の抗争が、権力の不条理そのものに根ざしているという彼女の指摘である。

「歴史を一つの長い錯乱に似せてしまうすべての不条理なことどもは、本質的な不条理つまり権力の本性に根ざしている。権力が存在せねばならないという必然性も、生存には秩序が必要である以上、明白でわかりきったことである。だが人間はみな同類であるかそ

れに近いわけだから、権力の帰属は恣意的なものだ。ただ外見上恣意的なものであってはならぬだけの話である。さもなければ権力はもはや存在しないことになる。威信つまり錯覚が権力の中心そのものにすえつけられる。あらゆる権力は人間活動の諸関係に依存するが、権力が安定であるためには、それを保護する人にも、それを忍ぶ人にも、またその外部にある諸権力にたいしても、外見上それは何か絶対的で触れえぬものと見えなくてはならないのである。秩序をかたちづくる諸条件は本質的に矛盾しており、人間は弱い権力につきものの無政府状態か、威信への配慮によって惹きおこされるあらゆる種類の戦争か、そのどちらかを選んでいくようにみえる。」(同上、著 I 389 ページ, EHP p.270)

こうした考察をめぐらせながら、ヴェイユは除々に均衡の概念に到達して行く。1937 年に書いたと推定されているある論文の中で、彼女はこう述べている。「人間の思考と行動が適用されるすべての分野で、鍵となるものは均衡についてのある概念であり、この鍵なくしてはただ悲惨な手さぐりがあるのみだ。」(「経済にかんする若干の省察」, 著 I 400 ページ, EHP p.321) この均衡の概念こそは、ヴェイユが死にいたるまで抱きつづけた深い確信であった。社会そのものに内在する力の支配を拒絶する彼女は、社会の理想的な均衡を見出すことによって、野放図な力の働きを消し去ろうともくろんだのである。彼女は社会的束縛のすべてを観念的に否定していたのではない。ただ、束縛のある形態、とりわけ全体主義的な権力の行使に対しては、仮借のない批判を浴びせて行ったのであった。ある手紙草稿には、こういう言句が見出される。

「あなたがお示しになったように、たしかに束縛は社会生活に必要やむをえざるものです。ですが、それには多くの形態があります。若干の形態は、精神的諸価値が(ほかに言葉がないのでこの言葉を使います)発展しうる雰囲気を存続させてくれます。これらはよい形態です。他のものはそれらの価値を殺してしまいます。……

私の見るところでは、権力集中化の方向での進歩は、どんな進歩でも、真の貴重なものすべてに対する取り返しのつかない損失を内包しております。中央集権の過剰は他日……不可避的に分権化をひき起こすことになろうと、私もあなたとおなじようにそう思います。しかし分散された生活の物質的諸条件は遠からず存在しなくなるでしょうし、殺された精神的諸価値も甦ることはないでしょう。」(「手紙草稿」(1938?1939?) 異稿, 著 I 455~57 ページ, EHP p.p.109~110)

「もし、ヨーロッパがその植民地もふくめて、幾世代にもわたって、ある一国の盲目的な専制政治の支配下におちこんだならば、そのとき人類が失うものは、はかり知れぬものがある。権力というものは、よく人が信じていることとは逆に、精神的な価値をまったく殺してしまうものだし、その痕跡すらとどめずに廃絶してしまうこともありうるからである。」(「ある決算のための考察」(1939?), 著 I 503 ページ, EHP p.399)

この専制権力とは、断るまでもなく、ヒトラー主義を名指していた。これらの考察が、

第二次世界大戦前夜の危機的状況の中でなされていることを忘れることはできない。この後ヴェイユは、おそらくは必死の思いでヒトラー主義の根源をたずね、その結果、これと同じ精神を古代ローマに見出したのであった。古代ローマと古代ギリシャ、それは、既述の私の表現に従えば、力と愛を象徴する人類史における二大存在であった。

〔5〕『「イーリアス」力の詩篇』ほか

社会的抑圧にかんするヴェイユの重要な論文として、通常『抑圧と自由』、それに『労働の条件』がとりあげられることはあっても、『「イーリアス」力の詩篇』（1940—41）が問題とされることは少い。しかし、私のみるところでは、初期から後期へと一筋の赤い糸を縫いながら、なおかつより高次の段階に飛躍していることを示しているのは、ほかならぬこの一篇である。既述のように、社会的抑圧にかんするヴェイユの分析の諸局面——権力、戦争、集団的なものは、相互に絡み合いながら力の考察に集約されて行ったように思われるが、その力の省察の頂点を成すのがこの論文であると位置づけても、さほど専断のそしりを受けることはあるまい。

一見すると、古典の世界に遊んでいるかのようであるが、彼女がここからつかみとってくるものは、今までと同様、痛いほどの現実との触れあいであった。ここでは割愛せざるをえないけれども、本来ならば、この論文の検討に入る前に、世界大戦前夜に彼女が書いたヒトラー主義の分析を概観しておくことが必要であろう。そうすることにより、本論文がどのような現実的関心に支えられた労作であるかが判明するからである。1939年に書かれたと思われる「ある決算のための考察」は、それまでに彼女がなした権力の分析をふまえながら、いかにも的確にヒトラー主義の本質と限界を看破している。（著Ⅰ 490 ページ，EHP pp.298～99；著Ⅰ 497 ページ，EHP pp.304～05；著Ⅰ 499 ページ，EHP p.306）

また、「ヒトラー主義の起源にかんする若干の考察」（1939～40）という長い論文の中では、唯一の権威の源泉であり、侵略傾向を内にもつ国家のことが論ぜられている。（著Ⅱ 75～76 ページ，EHP p.56；著Ⅱ 78 ページ，EHP p.58；著Ⅱ 80 ページ，EHP p.59）この論文の主題である、ヒトラー主義の起源としての古代ローマにかんしては、ヴェイユは、ローマ人の世界制覇の流儀、宣伝の技巧、帝国権力にたいする尊崇、精神的荒廃などについて詳細な検討を重ねている。結論は、抗しがたい流れのように、両者の類似に落ち着く。（著Ⅱ 68 ページ，EHP p.p.50～51）

そしてあたかもローマの国家体制の研究と対極的であることをみずから意識していたかのように、ヴェイユはギリシャ思想の研究に打ちこみはじめている。それはやがて、キリスト教、さらには東洋思想の研究にまで及ぶことになるのであるが——。

さて、ここで『「イーリアス」力の詩篇』の検討に入ることにしよう。ただしいうまでもな

くここで意図されているのは、その文学的論評ではなく、文学作品を素材とした力の省察にかんする社会的観点からの整理である。

本篇の昌頭の文章は、こよなく美しく、かつまた人類社会における力の要諦を衝いている。

「『イーリアス』の真の主人公、真の主題、その中心は、力である。人間たちに使われる力、人間たちを服従させる力、それを前にすると人間たちの肉がちぢみ上がる、あの力だ。そこに現われる人間の魂の姿は、たえず力との関係によって変形され、みずからは使用しているつもりの方にひきずられ、盲目にされ、自分の受ける力の束縛に屈した姿である。その後は進歩のおかげで、力はもう過去のものとなっている——そんな夢をえがいた人びとはこの詩篇に一つの文献を読んだかもしれないが、今も昔も全人類史の中心に力を見合わせるべきを知る人びとは、この詩篇にもっとも美しくもっとも曇りない鏡を見出すのである。

力は誰にまればそれに服従する者をも[・]ものとする。極限まで作用する場合、力は人間を文字どおりの意味でも[・]ものにしてしまう。力は人間を屍にするのだから。誰かがいたのに、一瞬ののちには、誰もいないのだ。これこそ『イーリアス』が倦むことなく私たちに提示する光景である。」（著II 86 ページ、以下SG）

本稿では、ヴェイユのこの作品のもつ精妙な味わいをそのまま伝えることはできない。解体することがそのまま美を破壊することにつながりかねないような緊密な有機的な美を、この作品が形づくっているからだ。従ってここでできることといえば、作品の諸断片を論理の糸によって拙劣につなぎ合わせることでしかない。

ところで、彼女によると、力によって服従者がも[・]ものと化すのは、生涯のある時期だけにとどまるとはかぎらず、人の一生を通じて作用するばあいがある。

「少なくとも哀願者というものは、ひとたび願いがかなえられると、またほかの人と同様の人間にもどるのだ。だが、死なないで一生も[・]ものになってしまっている、もっと不幸な人たちもいる。彼らの日々には自分たちの内心から由来するどんな働きも、どんな空隙も、どんな些細なことに対する自由な余地もない。これは他人以上につらい生き方をし、他人以上に社会的に低い地位にある人たちというわけではない。別の人種、人間と屍との妥協的産物なのだ。人間存在がも[・]ものであるということには、論理的に見れば、矛盾がある。だが不可能事が現実となってしまうと、矛盾は魂のなかで裂かれるような悲哀となる。このも[・]ものは四六時ちゆう一人の男、一人の女でありたいと熱望し、どんなときにもそうはなれない。これは生の流れに沿ってのびて行く一つの死であり、死が、抹殺するまでのあいだ、凍りつかせてしまっている生である。」（著II 93 ページ）

「人は奴隷が失う以上のものを失うことはできない。奴隷はあらゆる内面生活を失うのである。その少々を奴隷が再発見するのは、運命を変える可能性が生まれるときだけだ。

力の支配とはこのようなものだ。この支配は自然の支配同様にひろがって行く。自然もまた生の欲求が働きかけると、あらゆる内面生活を、母親の苦しみをさえ消し去る。」(著II 97 ページ)

「他人によって用いられる力は、それが永続的な生死の権能から成る場合、たちまちはなほだしい饑餓同様に魂に絶対的な支配力をふるう。そしてそれは、惰性的な物質によって行使される場合同様、冷酷でむごい支配力なのである。どこに行っても自分をこの上なく弱いと思う人間は、都市のふところにありながら、砂ばくのまっただ中に迷った人間とおなじように、いやそれ以上に、孤独である。」(著II 98 ページ)

だが、力の支配を受けるのは服従者だけではない。力のもつ魔力がその保持者をとらえて力の過度の行使を不可避とするから、まさにこのことにより、力を行使する者が力によって支配されてしまう。

「力は非情に粉碎しもするが、力をもっている者、あるいはもっていると思っている者を、おなじように非情に酔わせもする。真に力を所有する者は誰もいないのである。人間たちは、『イーリアス』のなかでは、一方には敗者、奴隷、歎願者、他方には勝者、首長というように、区分されてはいない。そこにはどこかで力に屈することを強いられないような人間は、ただの一人も見つからない。兵士たちも、たとえ奴隷身分ではなく武装しているにしても、やはり力の命令と凌辱とは受ける。」(著II 98~99 ページ)

「すべての人びとが生まれながらにして暴力を忍ばねばならぬように運命づけられているということ、これこそ真理であって、人間の精神は環境の支配力のゆえにこの真理からとざされているのである。強者はけっして絶対的に強くはなく、弱者も絶対的に弱くはないが、どちらもそれを知らないのだ。両者は自分たちが同類だとは思っていない。」(著II 104 ページ)

「このように暴力はおのれの手に触れる人びとをおし潰す。ついにはそれを忍ぶ者同様それを扱う者にとっても、自分の外部に現われるに至る。そのとき、運命のもとでは死刑執行人も犠牲者も等しく無垢であり、勝者も敗者も同一の悲惨のなかで兄弟だ、という理念が生まれる。勝者が敗者にとってそうであるように、敗者も勝者にとって不幸の原因なのである。……

力を中庸に用いることだけが、この歯車装置から逃がれさせてくれるかもしれないものなのだが、それは人力を越えた、弱さのなかにながら変わらぬ尊厳を保つのおなじくらい稀有な、精神の力を要求するだろう。さらに中庸に控えることにもまた必ずしも危険がないわけではない。なぜなら、力の四分の三以上を構成する威信というものは、何よりも弱者に対する強者の誇らかな無関心よりなるものであり、この無関心は大変伝染性のものであって、その対象である人びともうつるからである。ふつう政治的思考が過度をすすめるわけではない。ほとんどあらい難いのは、過度への誘惑なのである。」(著II 111~12

ページ)

この意味で、力はいわば二重の物化作用を発揮するというべきだ。これほど力の本質に迫った論説は稀であるといえよう。さらに続けよう。

「この寛大さを欠くゆえに、勝利の兵士は自然の鞭のごときものである。戦争に憑かれ、彼は、あり方はまったくちがうにしても奴隷とおなじように、一つのものとなってしまっており、言葉は、物質に対して無力であるとおなじく、彼に対して無力である。一方も他方も、力にふれると、その確実な効果を受ける。力の触れる人びとを啞にする、あるいはつんぼにするという効果を。」(著II 119 ページ)

「力の本性とはこのようなものだ。力のもっている人間をものにかえる能力は二重のものであり、二つの面から作用する。すなわち力は力を忍ぶ人びとの魂と力を扱う人びとの魂とを、違ったふうにはあるが等しくともに石化させるのである。……石化作用というこの二重の相をもった特性は本質的な力に属しており、力と接触させられる魂は一種の奇蹟にでもよらぬかぎり、これをまぬがれることはない。このような奇蹟は稀であり短い。」(著II 120～21 ページ)

力がそれに触れるすべての人びとを石化せしめる様は、戦争において最もよく現れるであろう。その残酷な形相を、ヴェイユは美しすぎるともいえる文章で叙述している。

「ひとたび経験してさえ、戦争はすぐにはゲームに似ることをやめない。戦争に固有の必然性は恐ろしいものであり、平和時の労働に結びつけられる必然性とはまったくの別のものである。魂は、もうその必然性を逃がれられないという場合にしか、それに屈服することはなく、それを逃がれているかぎりでは、必然性を欠いた日々、夢の日々を、すごすのである……。

……いつかは恐怖や敗北や愛する戦友の死が、戦士の魂を必然性の膝下に屈せしめる日がくる。戦争はそのときゲームであることを、あるいは夢であることをやめる。戦士はやっと戦争が現実存在することを理解する。これは苛酷な現実である。耐えうるにははてしなく苛酷すぎる現実である。死を内包しているのだから。」(著II 114～15 ページ)

「戦争の諸事実の冷厳なむごたらしさは、まったく粉飾を受けていない。勝者も敗者も、讃美も軽蔑も憎悪もされていないからだ。運命と神々が、ほとんどいつも、戦闘の変幻きわまりない命運を決する。運命に指示された限界内で、神々は至上権をもって勝利を、敗北を、按配する。そのたびに平和の妨げのもととなる暴行や裏切りを挑発するのは、神々である。戦争は神々固有のしわざであり、その動機といえば気まぐれか悪戯でしかない。戦士たちはといえば、勝者であれ敗者であれ、彼らを獣とかものとかとして表わしている比喩は、讃美の念も軽蔑の情もおぼえさせることはできず、ただ人間がこのように変形されうるという悔悟の気持ちを味わわせるだけである。」(著II, 129 ページ)

この形相をこそ人間の悲惨と呼ばずして何であろうか。人間のこの悲惨さを如実に映し

だしているのが、彼女によると、『イーリアス』と『福音書』である。これは「西欧のもっている唯一の真の叙事詩の精神」(著II 130 ページ)といえるものだ。彼女は沈痛の気持ちをこめて、再びつぶやくのだ、「不幸の正しい表現ほど珍かなものはない。」(132 ページ)

人間を容赦なく打ちずえるこの苛酷な必然性から逃れるすべははたして存在するのだろうか。その可能性を暗示するような言句が、すでにこの作品のなかに現れている。「ときどきこうして一人の人物が、トロイアを前にしたヘクトールのように神々の、あるいは人びとの救いをたたれ、ただ一人自分の運命と向かい合おうとすると、自分自身と語り合うことによって自分の魂を見出すことがある。人びとが自分たちの魂を見出すほかの瞬間は、彼らが愛する瞬間だ。人間同志の愛のほとんどどんな純粋な形態も『イーリアス』には欠けていない。」(著II 122 ページ)

しかし愛こそが力の拒否を可能とするという思想は、この後の別の論文の方にもっとはっきりと現れている。すなわち、こう言われるのだ。

「オク語文明を養った靈感の本質は、ギリシャの靈感のそれに等しい。それは力への認識からなり立っている。この認識は超本性的勇氣(courage surnaturel)にのみ属する。超本性的勇氣には、われわれが勇氣と名付けるものごとくが、またそれ以上にはるかに貴重な何ものかが含まれている。が、卑怯な者たちはこの超本性的勇氣を魂の弱さと取りちがえているのだ。力を認識するとは、それをこの世における絶対に至高のものと認めながらも、憎悪と軽蔑をこめてそれを拒絶することである。この軽蔑は、力の打撃にさらされているありとあらゆるものにたいする同情の別の面なのだ。

こうした力の拒否は、愛の概念においてその充実を示す……。」(「オク語文明の靈感は何にあるか?」1941?1942? 著II 226 ページ, EHP p.79)

「力との接触に屈服するものは、その接触のいかに問わず、墮落をまぬがれない。打つにせよ打たれるにせよ、それらは等しく穢れである、それらのみが穢れである。鋼の剣のつめたさは柄つかにおいても切っ先においても同様に致命的である。暴力との接触にさらされているすべてのものは、墮落するおそれがある。愛をのぞいては、この世のありとあらゆるものは一つの例外もなく、力と接触する危険にさらされている。ここでは、奴隷の境遇でありまた拘束の状態に近いフェードルやアルノルフのそのような、自然的な愛は問題にならない。それは、超本性の愛(l'amour surnaturel)、真理のなかをまっすぐに神の方へとおもむき、創造物への神の愛と一体化して神のみもとより下降する愛、直接的にせよ間接的にせよ、つねに神的なものに訴えかける愛のことである。」(同上, 著II 227 ページ, EHP p.80)

『根づくこと』にはっきりと現れているように、晩年のヴェイユは、社会的次元においては均衡の観念から法に希望を託することになるが、その考えはこの論文にもみてとることができる。だがわれわれとしては、ここではそのことよりも、《社会的動物》だけが力を

もっているという命題に注目しておくべきであろう。

「公の生活における純粋さとは、あらゆる暴力的なもの、すなわち集団的なもの、プラトンのいう社会的動物に由来するあらゆるものを、できるだけ抹殺してしまうことである。〈社会的動物〉だけが力をもっている。(La Bête Sociale a seule la force.) 社会的動物は集団的な力を用いるか、あるいはそれを複数の人または個人に委託する。しかし法としての法は力をもたない。そして法は書かれたテキストにすぎなくとも、自由を守る唯一の砦なのである。」(同上, 著II 229 ページ, EHP p.82)

私自身としては、この文章の最後のくだりには、必ずしも同意しきれないものを覚える。しかし、《社会的動物》についてのヴェイユの指摘には、ただ声を吞んで聴き入るのみである。なお、これと同じ考えが、『重力と恩寵』の中の箴言や『抑圧と自由』の中の一論文(「マルクス主義学説は存在するか?」1943)のなかでもくりかえされていることをつけ加えておこう。

本篇で使用した略記号は、次の著作を示している。

著I = 春秋社版『シモーヌ・ヴェーユ著作集・I』(1968)

EHP = *Ecrits historiques et politiques*. (Gallimard, 1960)

著II = 春秋社版『シモーヌ・ヴェーユ著作集・II』(1968)

SG = *La source Greque*. (Gallimard, 1953)